

【最優秀賞】

ガネーシヤが笑った日

大家 衣穂理（奈良県 奈良県立青翔中学校 2年生）

時々行っていたお寿司屋さんが、突然店を閉めた。しばらくの間、閉店の状態が続き、元々さみしかった商店街が、もっとさみしくなった。そこが元はお寿司屋さんだと忘れそうになったころ、大工さんが来て「ガンガンゴゴン」と何やら工事をはじめていた。「何にうまれ変わるのだろう。」という期待と、何だか見えた目があやしくなりつつある感じに、何かうさんくさい商売でも始まるのかと、少し遠巻きに工事の進み具合をみつめていた。工事が始まり間もなくして、家のポストに一枚のチラシが入っていた。初めて見る店だが、場所からすればあのお寿司屋さんがあった場所だった。

「あー、ネパール料理屋さんに変わったんだ。」

チラシを見た母がそう独り言を言っていた。横から父が興味津々でチラシをのぞいていた。大のカレー好きの父が、

「オープンしたら一回行ってみようよ。」
と私達をさそった。

オープンして数日たった土曜日家族でその店に向いた。外から中の様子がほとんどかがえない造りなので、扉を開けるまで店の中がどんな様子なのか、お客さんがどんな人なのか、店員さんもどんな人なのかさっぱり分からなかった。父が思い切った扉を開けると、

「イラタイマテ。」

と威勢の良い声が店中に響いた。声の主はこの店の料理人とアシスタントの男性だった。見た感じで、日本人ではないことが分かった。ネパール料理店に変わったにも拘わらず、店のテーブルやいすはお寿司屋さんの時のままだった。食器の一部もお寿司屋さんの時に使っていた物だった。何だか妙な店だった。私達の席に料理人とアシスタントの男性が来てオーダーをたずねた。その時に料理人は、ネパール出身であること、京都のネパール料理店からうつってきたこと、そしてその料理人さんの名前はパピンドラであるということ話をしてくれた。ネパールなまりの日本語だったので時々意味が分からなかったが、表情とかジェスチャーで何となく言いたいことが分かった。

「これがコミュニケーションってやつなんだなあ。」

と思った。本格的なネパールの味を気に入った父は、月に数回私達をつれてその店に通った。初めは、

「イラタイマテ。」

と私達をむかえていたあいさつも次第に

「イラツシヤイマセ。」

と上手な日本語に変わっていった。私達家族とパピンドラさんの距離はだんだんと近くなり、パピンドラさんは好きな和食の話とかふるさとのネパールのことを話してくれるようになった。私はそんな日がずっと続き、パピンドラさんともっと仲良くなれる

と思っていた。

ところが、ある日、偶然出会った道端で

「コンシユウノニチヨウビニ、ハイテンサイルコトニナリマシタ。サイゴニモウイツカイオミセニキテクラサイ。」

と言われた。急なことで、驚きのあまり声も出なかった。けれども気持ちを落ちつかせて、話をしっかり聞くと、その年にネパールでおきた大震災が原因で、実家が倒壊し、残してきた家族が心配だから帰国することにしたということだった。ニュースでネパールの震災を知って、

「ネパールの家は大丈夫?。」

と聞いたのは半年以上前で、その時は、

「ダイジョブ。」

と言っていつも通りに私達においしいネパール料理をだしてくれた。今思えば無理してくれてたのかなと思う。

閉店の日の日曜日、この日がパピンドラさんとの最後の時間だ。今まで通ったこのお店のことをしっかりと覚えていたと思った。料理の味やパピンドラさんのこと。最初は不気味だったガネーシャという象の姿をした神様のポスターも今は名残りおいしい。お寿司屋さんのおかげから使われていたテーブルもイスも食器も、それらは全て私にとってネパールの思い出だ。食事を終えて、偶然にもその日満杯になったスタンプカードと引き換えに父はネパールのビールをもらった。今までのお札にともう一本もらった。スタンプカードがお別れのカードになるとは、開店したときは想像もしていなかった。ネパールという国を知らなかった私にとってこの店が、パピンドラさんが、ネパールという国だったのだ。店を出る時になり、私は思わず言った。

「ナマステ。」

パピンドラさんは、笑顔で返してくれた。

「ナマステ。」

私たちは胸の前で手を合わせ、ゆっくりおじぎをした。顔を上げるとポスターのガネーシャも微笑んでいるように見えた。